



巻頭言

化学のユートピアを目指して

Aiming for a Chemistry Utopia



平井憲次 Kenji HIRAI

相模中央化学研究所 副理事長・所長



相模中央化学研究所は、日本の化学産業の振興に資する独創的な革新技术の創出を目指す研究機関として1963年に設立された。組織再編や2001年の研究所の移転など様々な紆余曲折を経て、今年に設立48周年を迎える。また、昨年4月からは、新しい公益法人認定法に基づく公益財団法人に移行し、新たな一步を踏み出した。

設立以来、相模中研は多くの実用的な化学技術を創出し、化学産業の発展に貢献してきた。この間、日本の化学工業は様々な経済危機を乗り越え重要な基幹産業に成長してきたが、近年の新興国の科学技術の躍進や、記憶に新しい世界的金融危機は、我が国の化学産業の収益性や競争力を大きく低下させ、特に、化石燃料や希少金属などの資源の価格高騰問題は、資源は限りあるものであることを再認識させるものである。このような厳しい社会情勢の中にあって、化学による社会貢献を究極の目標とする本研究所は、刻々と変化する研究環境に影響されない新領域・新分野の開拓につながる合目的基礎研究を継続的に推進し、新しい学術・産業分野を牽引する先端的な化学技術の創出や、国際競争力に長ける化学製品を提供できる革新技术の開発に多面的に取り組んでいかなければならない。

さらには、もっぱら企業からの寄附金と技術収入を主な財源としている本研究所が、持続的に事業展開を図るためには、安定な財政基盤の構築が不可欠であるが、企業からの財政支援に甘えてばかりではいられない。賛助会社に対する説明責任を果たす上でも、また公益性を旨とする研究所の独自性をさらに高めるためにも、研究所発の化学技術を、技術収入をもたらす実用技術へと転換する応用研究・実用化研究の推進が極めて重要である。

これまで相模中研は、その研究資源をとりわけ有機合成化学の領域に投下し、有用な化学物質の創製や実用的な化学製造プロセスの開発につなげてきた。一方、180余年にわたる有機合成化学の歴史の中で、ここ数十年間の有機合成技術の進歩は著しく、今や、合成できない化合物はないとさえ言われるに至っている。また、情報ネットワークの急速な普及により、これまでに蓄積された合成技術はデータベース化され、所望の情報を瞬時に検索可能なまでに共有化が進んでいる。今、有機合成化学は円熟期を迎えていると言える。

このような状況の中で、有機合成化学を基盤とする本研究所は、今後もその競争力の源を新奇性及び意外性に富んだ「ものづくり」に求める以外に、そのための革新技术の時宜に適った創出のみが活路である。さらに、その研究ターゲットは産業界が求めるニーズを十分満たし、研究所の独自技術を最大限活用できるものでなくてはならない。成熟しつつある有機合成化学にのみこだわり、特定の化学産業との連携にとどまることは、革新的な化学物質の開発を阻むばかりでなく、公益性の欠如にもつながる。小規模公益法人であることの利点を活かし、多様な学問領域にわたる産学の研究者と適時に情報交換を図り、柔軟に連携を取ってゆくこと。これによってしかつかめない非教科書的情報を共有して、相模中研は、個々の研究者がその能力を最大限発揮しつつ、一方で自己満足的な研究も許容するよき伝統も守りながら、「化学のユートピアを創る」という先達の夢の実現を目指す。

英訳版は155ページをご参照下さい。English version, see pp 155.

© 2011 The Chemical Society of Japan